

アーネスト・サトウと甲斐の国の人々

河田 敦子

本研究は、幕末維新时期に駐日外交官として活躍したアーネスト・サトウと甲斐の国の人々との交流がどのように生じ、どのような意味をもったかを考察することによって、幕末期に甲斐の国の人々の開明性を育んだものは何かを明らかにすることを目的としている。幕末期に英語を身に付けるために長崎に居る外交官の身边で職を得ようとする者は少なくなかった。こうした動きは、「身分の低い幕臣の『立身出世』の糸口」と捉えられている。しかしながら、幕府直轄地であった甲斐の国での洋学志向は、幕府が洋学の必要性を看取り審書調所創設を計画する以前から高かった。それはなぜか、そのような関心はどのような人々によってけん引され、どのようなネットワークを形成したのかを本研究は明らかにする。人々が何か共通の興味関心を持って交流し、ネットワークを形成することには重要な教育的意義と歴史社会的背景があると筆者は考えている。

キーワード：アーネスト・サトウ 幕末維新时期 甲斐の国 徽典館 ネットワーク

はじめに

本研究の目的は、幕末維新时期に駐日英国外交官として活躍したアーネスト・サトウと甲斐の国（現山梨県）の人々との交流がどのように生じどのような意味をもったかを明らかにすることによって、幕末期に際立った甲斐の国の人々の開明性を育んだものは何かを考察することである。本研究で「甲斐の国の人々」とは、甲斐出身者または甲斐の国に3年以上居住経験がある者とする。

アーネスト・サトウは、幕末維新时期に活躍した外交官として広く知られている。彼は、1843年にロンドンで生れ、1862（文久2）年から1882（明治15）年までの間に英国公使館で通訳生、日本語書記官として通算約20年間と、1895（明治28）年から1900年までを駐日大使として約5年間を日本で過ごした。両方の期間を合わせると通算約25年間を日本に滞在したことになる（萩原10-11）。サトウは18歳の時にローレンス・オリファント『エルギン卿遣日使節録』（Laurence Oliphant, *Narrative of The Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59*. William Blackwood and Sons.1859）を読み、日本という未知の国にあこがれを抱くようになった。偶然募集が出た日本とシナ行きの通訳生の試験に合格し、1861年にロンドンを出航、1862年に長崎に到着した（サトウ『一外交官（上）』13-14）。当初は駐日英国公使オールコックの通訳生であった。1865年ハリヤー・パークスがオールコックの後任駐日公使となり、1868年、サトウは、「日本語書記官」の地位に就いた。サトウの駐日外交官としての最大の功績は、幕府瓦解に伴い天皇が条約締結権の主体であることを日英双方に認めさせる外交文書を作成したことであると自身で述べている（小田21）。

サトウについての研究は少なくない。生まれてから全生涯を追った研究として、①萩原延寿『遠い崖』

全14巻（朝日文庫 2007～2011年）がある。外交官としてのサトウの回想録である *A Diplomat in Japan* の邦訳として②坂田精一訳『一外交官の見た明治維新 上下』（岩波文庫 1960年）がある。旅行好きだったサトウの旅行記を中心に翻訳した③庄田元男訳『日本旅行日記 1. 2』（東洋文庫 1992年）、サトウの日記を原文のまま刊行した④Morton, Robert & Ruxton, Ian *The Diaries of Sir Ernest Mason Satow 1861-1869, (1870-1883, 1900-1906, 1906-1911)*（Eureka Press, 2013, 2015, 2015, 2016）等がある。①はサトウの生い立ちから日本に興味を持ち、1861年にロンドンを出発するまでの経緯も含めた生涯にわたる日記抄である。②は1861年に日本通訳生を命ぜられてから、1862年に上陸、1869年2月に日本を離れるまでを対象としている。③は1872年の富士登山から始まり、日記の中から旅行記を抜粋している。④は1861年に通訳生として日本行を命じられてからの日記を原文で公刊した著書であり、全4巻で1911年までの日記を対象としている。

サトウがあこがれたローレンス・オリファントは、エルギン伯の秘書として日本に滞在し、1861（文久元）年に東禅寺事件で負傷し、帰国したが、英国帰国後も森有礼等薩摩藩からの留学生を親身に受け入れた親日派であった。サトウが来日してからも、攘夷派による外国人殺傷事件は後を絶たなかった。1862（文久2）年生麦事件等、1867年にはアーネスト・サトウも襲撃されている。そのような中でも、サトウと関わった、あるいは関わろうとした日本人は数知れず存在した。中でも甲斐の国出身者は、筆者の調べた限りでも、小野清五郎（通訳・書記）、平山敬忠（外国奉行）、三枝与三郎（ボーイ・三枝商会創立者）、木山清一（通訳）、内藤伝右衛門（出版者）、永峰秀樹（翻訳業）等、少なくとも6名いる。これらの人々は、後に様々な分野で活躍した。

何故、幕末期、幕府直轄地であった甲斐の国の人々の中にいち早く洋学の必要性を看取り、英語を学ぼうとした者たちが少なからずいたのか。『東京大学百年史』では「（安政4（1857）年）当時は幕臣の間に洋学に対する関心の高まりがあったと言える。その一因として、身分の低い者や勤仕のない者にとって、当時は洋学を身につけることが立身出世の糸口となると考えられていた」と述べられている（『東京大学』25）。しかしながら、後述するように甲斐の国の人々が洋学への関心を持ち始めた時期は、1840年代であり、これより10年は先んじている。甲斐の国の人々がサトウの周辺に多くいた理由は、『東京大学百年史』が示唆しているように「立身出世の糸口」を求めたからだろうか。この点を考察することは、幕末における洋学志向の端緒とその動機を明らかにすることにもなるだろう。近年幕府内部に洋学の必要性を看取り、洋学研究を進め開国を進言していた小栗上野介忠順のような人物が存在したことも明らかにされている。小栗は斬首されたが、幕府内にあった根強い攘夷意識に対し、江戸から少し離れた距離から世界の中の日本という捉え方をし得た人々がいた。彼らは薩長勢力とは別に、明治期日本社会を担う人々となったが、薩長中心の歴史観の中で次第に埋もれてしまった人々である。本研究は、そうした歴史に埋もれがちな人々の存在に光を当て、幕末維新期の幕臣の国際性を育んだ甲斐の国の地域的特性と教育的背景を明らかにしたい。

1. 開国の背景と先行研究の検討

1-1 開国前史～長崎と甲斐の国間の人的交流～

本節では、開国前史として、1820年代から1850年代の長崎と甲斐の国の人的交流について概説する。広瀬元恭は、1821（文政4）年甲斐藤田村に生まれ、蘭方医となった。元恭は花輪村時習館で松井渙齋に学んだ後、1835（天保6）年から1844（天保15）年まで江戸に住む蘭方医坪井信道に師事した。緒方洪庵も坪井門下で広瀬の兄弟子にあたる。広瀬は、1844（弘化元）年京都に時習堂を開塾した。1849（嘉永2）年に『新訂牛痘奇法』を出版。天然痘治療に貢献した。広瀬の師、松井渙齋は、徽典館で教鞭を取り甲斐の私塾時習館で教え、その後1836（天保7）年、西野村に創設された郷校松聲堂（後の西野学校）に招聘され、1848（嘉永元）年まで教えた（鬼丸）。永峰秀樹の実兄小野泉も松井の教え子の一人である。

小野泉は、松井の紹介で広瀬元恭に医学を学び、永峰秀樹は長崎に行く途中病で倒れた時に広瀬元恭の世話になった（永峰『思出』4）。

1823（文政6）年、長崎にシーボルトが到着した。シーボルトは、日本に在留するオランダ人を治療する医師としてドイツから来日した。シーボルトの元には、西洋医学を学ぶために全国から人が集まってきた。その中には、本稿で取り上げる永峰秀樹の兄小野泉の師となる戸塚静海もいた。シーボルトの元で造船を学ぶために、ボーイとして住み込み、蘭学を学び始めた少年が幡崎鼎である（天野）。幡崎は、1828年シーボルト事件に連座し、町預となったが、1830（天保元）年に脱走。幡崎鼎と名乗り、大坂で蘭学塾を開いた後、江戸に出て水戸藩に仕えた。1832（天保3）年江戸に出た時は、江戸に住む坪井信道を訪ねている。小石川にある水戸藩屋敷に出入りを許されたのは翌1833（天保4）年であった。江戸では高野長英らと共に、渡辺崋山の蘭学研究を助けた。1838（天保9）年、幡崎鼎が長崎で捕らえられ、1839（天保10）年、蛮社の獄で渡辺崋山が捕縛される等、幕府による洋学への取り締まりが強化されていた。そのころ、伊豆韮山では、甲斐の代官も務めた江川太郎左衛門が渡辺崋山に西洋砲術を学んでいた。江川は、1836（天保7）年甲斐の代官となり、天保の大飢饉（1833（天保4）～1839（天保10）年）により生じた騒動を終息させ、「世直し江川大明神」と称えられた。江川は、幡崎とも交流があった。江川は国防のために幕府の命を受け、1854年から韮山反射炉の建設に着工したが、その完成の前に死去した（片桐）。江川は、生前、目付鳥居耀蔵と江戸湾防備対策を巡って対立していた。洋学弾圧、蛮社の獄の首謀者の一人が鳥居であり、その刃は江川にも向けられていた。

こうした中で、1853（嘉永6）年7月ペリーが浦賀に来航し、幕府内部でも洋学への志向が高まっていた。西欧の武力に対する警戒から、西欧に対する知識を幕府も強く求めるようになっていた。1854（安政元）年6月、幕府は筒井政憲、川路聖謨、岩瀬忠震、古賀増の四人を異国応接掛に任命した。水野忠徳も加わった。翌1855（安政2）年7月9日筒井政憲、川路聖謨、水野忠徳、岩瀬忠震が洋学所設立委員となり、勝海舟と小田又蔵はその補助員となった（大久保42-43）。小田又蔵、勝海舟、箕作阮甫、森山英之助、の四人はかくして蕃書調所創設の草案づくりにとりかかるのである。幕府は、「西欧の何たるかを見極め、その砲術・航海・兵学などの学術を学び取り、あわせて蘭学稽古所を設け、外圧に対処しうる人材を、急ぎ養成する必要がある」（倉沢77）として、1856（安政3）年2月13日蕃書調所を正式に発足させた。

上記の幕府や幕府以外の長崎における蘭学をめぐる交流の中に、本稿で取り上げる甲斐の国の人々や彼らと交流のあった人々が入っている。長崎と甲斐の間には、蘭医学をめぐる、大阪に緒方洪庵の適塾、京都に広瀬元恭の時習堂、江戸に坪井信道の日習堂、そして甲斐の時習館へとつながる、強いネットワークと人々の交流があった。幡崎鼎と広瀬元恭は共に坪井信道に師事したが、2年違いですれ違ったようである。甲斐の国の人々は、自然とその流れに乗り、伝手をたどりながら蘭学を学んでいた。1859（安政6）年に横浜へ出た福沢諭吉は、欧米人にオランダ語がほとんど使われていないことに気付き、西洋と日本を媒介する言語をオランダ語から英語に切り換える必要性を看取した。英語の需要が急速に高まってきた時期に英国からやって来た外交官がアーネスト・サトウだったのである。

1-2 先行研究の検討

「はじめに」で挙げた木山以外の5名については、それぞれに研究がある。小野清五郎と三枝与三郎は実の兄弟である。小野清五郎については、松本良三『小野清五郎伝』、平山については『平山省齋と岩瀬忠震』（陶）、三枝与三郎については、松本良三『現実の彼方へ』がある。内藤伝右衛門については、稲岡勝「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」（稲岡）、清雲峻元「内藤伝右衛門」（清雲）等がある。伝右衛門の養母ますについては拙著『幕末明治の女性 内藤ますの生涯とその教養形成過程』（河田）がある。永峰秀樹は、内藤伝右衛門と懇意であった小野泉の実弟で内藤の出版社から翻訳書を出版している。

永峰秀樹についての研究には、『明治初期翻訳・文化功労者 評伝 永峰秀樹』（保坂）と自叙伝『思出のまゝ』等がある。木山清一については上記アーネスト・サトウの日記に出てくる以外に資料がない。これらの先行研究については本文中で述べる。

サトウは旅行と登山を好み、日本全国に足を運び、とりわけ富士山には強い憧憬を抱いていた。サトウと旅行・登山については、庄田元男訳『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』（サトウ『山岳記』）がある。この著書には、最後にサトウが内藤伝右衛門に会いに行くと綴った日記が出てくる。

幕末期甲斐の人々に焦点を当てて歴史を読みなおそうという試みは、既に陶徳民によって着手されている。陶は、『平山省斎と岩瀬忠震』において、「幕府の役人たちを『保守』・『無能』として一概に否定してしまった『薩長歴史観』を覆す」ことを目的として、平山と岩瀬を取り上げたと述べている（陶36）。

アーネスト・サトウと日本人との関係についての研究には、サトウが寵愛した秘書野口富蔵（会津出身）について、國米重行『幕末英国外交官 アーネスト・サトウの秘書 野口富蔵伝』（国米）、サトウの実子で植物学者となった武田久吉とサトウとの関係について、井戸桂子「日光におけるアーネスト・サトウと武田久吉」（井戸）、甲斐の人々とサトウとの関係についての研究は、内藤伝右衛門に関する稲岡の研究（前出）の外は特にない。後述するが、アーネスト・サトウが特に甲斐の国の人々を愛し、高く評価した記述を筆者は見出せていない。

一般に「洋学史」と言われる分野と本研究との関係を述べたい（竹村、有坂、岩生、大久保、大塚、原、緒方、宮永）。前述のように本稿で取り上げるサトウと関わった甲斐の人々は、通訳、商業、出版業、翻訳家等々、多様な職種で活躍しており、「洋学」という学問的研究の範疇には入れられていない。甲府にあった幕府直轄の学問所徽典館について、成瀬哲生は、「徽典館は国際化のための人材養成の場であった」と指摘している（成瀬「下」242）。倉沢剛『幕末教育史の研究』は、幕末の日本全国の教育状況を詳細に調査研究した大著であるが、第1巻「直轄学校政策」、第2巻「諸述伝習政策」、第3巻「諸藩の教育政策」に分けられている。第1巻「直轄学校政策」は、幕末に幕府が対欧米政策のために設立した軍学校や語学学校を研究対象としており、徽典館は取り上げられていない。倉沢の研究は、自身も述べているように「幕末教育政策史」の研究であって（倉沢747）、本研究が対象としているような人と人の交流やネットワークの歴史ではない。

筆者は、人々が何か共通の興味関心を持って交流し、ネットワークを形成し、高め合おうとすることには重要な教育的意義があると考えている。本研究が対象とする洋学者、通訳、翻訳者、商人も含めた幅広い階層における西洋志向の地域的ネットワークや人々の交流を取り上げることは、本研究のオリジナリティと言える。更に、今まで多く研究されている幕末明治期の洋学に関連ある人々は留学体験者が多い。これに対し、本稿で取り上げる前出6名の人々には留学体験者はいない。木山については情報が無いが、少なくとも『幕末明治海外渡航者総覧 第3巻 検索編』には木山の名前は無い。しかるに何故、日本の開国に貢献できたのであろうか。その先見性と開明的な素養と教育力は、如何に育まれたのかを本研究は明らかにしたい。この点について、まずは、5名それぞれの人物像を調査検討することによって、考察したい（木山清一については史料が無かったので、実際本稿で取り上げるのは5名である）。

2. アーネスト・サトウと関わった甲斐の国の人々

2-1 小野清五郎

小野清五郎は、1836（天保7）年に、山梨県笛吹市石和町の三枝家長男に生まれ、旗本小野家の養子となった。松本良三によれば、「三枝氏は代々庄屋を務めた家柄であり、遡れば、武田の驍将三枝勘解由左衛門に発する地方の名門である」と記している（松本『小野清五郎』2）。清五郎は幼少から優秀で、徽典館への入校を許された。久貝伝太、岩瀬修理、特に平岩右近に見込まれ、優秀な成績で同館を卒業す

ると同時に、平岩が江戸に伴い昌平坂学問所で学ばせた。同校卒業後に教授、さらには教頭になった（松本『小野』3）。後述するが、「徼典館学頭名簿」で久貝、岩瀬、平岩の三氏が徼典館に勤務していたのは、1847（弘化4）年～1852（嘉永5）年である。それゆえ、清五郎は、12歳から16、7歳まで徼典館で学び、その後昌平坂でさらに研鑽を進め、同校教授になったと推測できる。漢学の傍らに洋学を学んだという。清五郎は、1865年に蕃書調所属となった。当時泉岳寺付近にあった英国公使館職員に日本語を教授した。1867年9月3日のアーネスト・サトウ日記に出てくる「my writer Ono」（Morton & Ruxton 250）は、小野清五郎である。

清五郎は、「御用金廃止論」（明治2年）、「切腹廃止論」（明治2年）等を公議所に提出、前者は可決されたが後者は否決された。1869（明治2）年10月深夜に何者かによって銃撃され、死亡した。松本は、この暗殺の原因は「切腹廃止論」にあったと断定している（松本『小野』31）。享年、34歳であった。

三枝家は、その発祥を仁明天皇（810-850年）の時代に遡るとされている。『寛政重修諸家譜』によれば、その時代に活躍した三枝守国を初代とし、守国は「故ありて甲斐の国山梨郡能路に配流せらる。」（『寛政』380）とある。松本が言う勘解由左衛門は、25代目、24代当主虎吉の嫡子守友（生年天文6（1537）年。死没天正3（1575）年。）のことである。虎吉には、守友、守義、女、昌吉、吉親、守光の五男一女があり、守友が嫡子として家を継ぎ、勘解由左衛門を名乗った。吉親は監物を名乗り、三枝七内の本家筋となり、代々七内を名乗る家系となった。勘解由左衛門は、野呂（現一宮町南野呂）に居住し、柏尾山に大善寺を創設し、長女を駿河浅間新宮神職従四位中村左近将監昌貞の妻とした。守友の死後直系の三枝家は、嫡子守吉が幼少であったため、守友の弟昌吉が後見となり、近江伊庭、武州に領地を持ち、甲斐からは離れて順調に昇進していった。他方、清五郎の実家である松本の三枝家は落ちぶれていった。三枝家は、雨宮家に嫁した娘夫婦を養子にして、娘の夫で清五郎の父英作の尽力で回復を図ったのである。

小野清五郎は、三枝英作の長男であったが、その英才を評価されて旗本小野家の養子となった。英作は、長男清五郎を他家に養子に出し、次男に家督を継がせ、三男与三郎を英作の実家雨宮家に養子に出したのである。

2-2 平山謙二郎（省齋・敬忠）

平山は、1815（文化12）年、陸奥国三春藩士黒岡活円齋の子として生まれた。平山省齋の養子平山成信が著した『省齋年譜草案』によれば、1848（嘉永元）年、小普請平山源太郎の養子となり、1852（嘉永5）年、某日付の内命を受けて下田に徹行してロシア船日本漂流民送り戻しの事実を探った。1855（安政2）年には、阿部伊勢守から岩瀬忠震の随員として下田に赴くことを命じられる。同年5月4日「大筒鑄立車台其外製造御用相勤候二付為御褒美白銀拾五枚」を受け取った。1856（安政3）年7月にアメリカ人応接のため下田へ行くことが但馬守から申し付けられる。同年8月イギリス船渡来の応接のため、長崎へ岩瀬忠震と同船して赴く。1857（安政4）年3月には、「蕃書調所御取建御修復中見廻立合御用相勤」とある。5月に再び長崎行きを命じられ、同21日水野忠徳、岩瀬忠震に随員して長崎に到る。「長崎ニ於テ和蘭商法ノ規約ヲ改革シ寛永已來年々銅六十萬斤ヲ交付スルノ法ヲ廢スルノ件ニ尽力ス」とある。1859（安政5）年4月岩瀬の旨を受けて、屢々橋本佐内と往復贈答した。安政の大獄が起り、1860（安政6）年9月10日「思召有之候二付御役御免小普請入差扣被仰付候」とあるので、お役御免となり、甲府勝手小普請を拜命されたのである。小野寺龍太は、「平山謙二郎（敬忠、省齋）は忠震より三歳年長、下級の幕臣から徒目付となり、安政年間には堀利熙や岩瀬忠震など海防掛目付の従者として北海道や伊豆、長崎など日本全国を駆け回った。彼は詩文が得意で仕事のできたから目付たちに愛されたが、忠震の腹心であったために井伊直弼に忌まれ左遷された。しかし、忠震の死後の文久2、3年ごろから再び幕政に復帰して目付や若年寄・外国奉行などの要職に就き対薩長主戦論を吐いたが、明治になると神道大成教を創立し、氷川神社や日枝神社の官として敬神愛国を唱えるという面白い人生を送った。（中略）彼

は1860（安政6）年に左遷されそれ以来甲府に居た。忠震も昔徽典館で教えたから二人が詩文を往復すると、それは『夢は山紫水明の郷に飛ぶ』のように甲州の山紫水明を詠んだ詩やあるいは昔の旅の思い出になった。」と述べている（小野寺 312-313）。この文章中では、甲府行きが「左遷」と捉えられている。甲府に行くことは「左遷」を意味したという記述は、『小野清五郎伝』にも見られる。昌平坂学問所の教授たちは順番に徽典館に赴いたが、岩瀬に関する前述の小野寺の著書にも、甲府行きを「左遷」と捉える箇所がある。

平山は、1860（万延元）年から1862（文久2）年まで甲府に在勤した。この後、1862（文久2）年禁を解かれ、江戸小普請を老中より拜命され、10月には函館奉行支配組頭勤方となった。1865（慶応元）年外国御用立合を拜命、翌1866（慶応2）年、大阪行きを命じられ長崎へ向かった。同年8月29日外国奉行を命ぜられ、9月函書と改名。1867年8月から10月14日の大政奉還までの間に、平山は頻繁にサトウに会っていた。サトウの日記や、『一外交官の見た明治維新』には、平山の名前が頻繁に登場する。サトウは、両著において平山を「平山は最近昇進した人で、狡猾そうな鋭い顔つきの、小柄な老人で、素姓はどちらかと言えば低い方だった。私たちはこの老人に狐というあだ名を呈していたが、それは平山にはうって付けの名であった。」と評している（サトウ（下）38）。1867（慶応3）年2月10日、対州へ御用のため出立することを命じられる。これは、1866年フランスと朝鮮の間に戦争（丙寅洋擾）が起こり、朝鮮を説得して開国させる目的のために、対州より朝鮮へ渡航するよう命じられたためである。永峰が同行を望んだのは、この平山の朝鮮行きであった。しかしながら、平山は、8月土佐で起こった英国水夫殺害事件を解決するために、急遽長崎へ赴くことになった。同事件は、土佐藩士を処罰することで一応解決した。平山はその直後に伊豆熱海でフランス公使に会い、耶蘇信者の件を弁明しなければならなかった。1868（明治元）年若年寄を拜命するも辞表を提出。平山は、お役御免となった。以後神職者として活躍した。

アーネスト・サトウは、前述のように平山に好印象は持たなかったようであるが、永峰が一番頼ったのは平山であった。平山の息子である平山成信は、省齋について「従来子弟ヲ教育スル事ヲ好ミ竹村久成ノ家ニ寓居セシ頃モ餘暇ヲ以テ教授ヲ為シ甲府謫居ノ間ハ門人頗ル多ク箱館在勤ノ節モ常ニ数名ノ門弟アリ静岡ニ移住セシ後ハ専ラ教授ヲ為シ東京ニ帰住セシ已来モ同様門弟ヲ教育シ居リ申候」と述べている（平山 430、35）。こちらの人物評の方が平山省齋の人柄として妥当であろう。

2-3 永峰秀樹

永峰秀樹（1848～1927）は、ギゾー『欧羅巴文明史』、『暴夜物語』、ミル『代議政体』の翻訳で知られる。永峰は1848（嘉永元）年甲斐国巨摩郡浅尾新田（山梨県北杜市明野町）に、漢方医小野通仙の四男として生まれた。長兄小野泉（1830～1884）は、江戸でシーボルトの弟子戸塚静海、京都で広瀬元恭に師事した蘭方医である。永峰の叔父は画家三枝雲岳であり、その次男元周は広瀬元恭の養子となって元恭の後を継いだ。永峰秀樹については、保坂忠信『明治初期翻訳・文化功労者 評伝 永峯秀樹』（リーベル出版 1990年）、永峰秀樹『思出のまま』（昭和3（1928）年）、柳田泉「永峯秀樹伝」（『明治文学研究第5（明治初期文学の研究）』（1961年）等がある。

保坂によれば、永峰は7歳から18歳まで甲府に出ている両親のもとから徽典館に通い、漢学を学んだ。彼の漢学の師は中村敬宇（当時徽典館学頭）、平山省齋であった。秀樹は、父から「20歳（数え年）よりは独立せよ」と言い渡されていたため、16歳の時より武人になるために森工越四郎という剣客の家に寄宿し、19歳の時には「一人の敵には敗れじ」という自信を持つほどになっていた。19歳の時、徽典館時代の学頭で恩師であった内藤七太郎（氷川）が京都にうろつく浪士達を取り締まる役人たちのためにつくった文武場の文の方の主任を命じられたので願って随行することになった。1867年の夏、甲府の漢学の師であった外国奉行平山函書頭が京都に来たことを知り、その旅館に尋ね、平山の従者で、甲府で秀

才の誉れ高かった吉川喜作から平山が朝鮮事件で朝鮮にわたることを知らされ、吉川の斡旋で朝鮮行きを決めた。しかし、突然土佐でイギリス人兵士が土佐藩士に殺される事件が起こり、平山が土佐行きとなったため、大阪から高知へ軍艦回天丸にのせてもらう。長崎に着き、平山の奉行役宅に居た時に、英国公使アーネスト・サトウに出会った。永峰は、この時の様子を「在崎中度々英の書記官サトウと云ふ人来り、蓋し土佐の事件と朝鮮との為ならん、此滞留2か月ほどなり。先生は此間を徒らにさすまじとてか、余を年若き通事（ママ）某に托して英語を学ばしむ」と記している（永峰『思出』7）。「この著名な若い外交官の姿は、19歳の秀樹の心に強く残った」と保坂は記している。永峰は、長崎に2か月滞在する間、平山の尽力で若い通辞について英語を学び、「単語百位」教えられたが、英語に対する熱意はそれほどなかった。江戸に帰って平山図書頭の「箱蕃」という役目で江戸城の奥まで入る機会を得た。内藤氷川について京都にも下った。永峰は、幕府の瓦解を目の当たりにしつつ、吉川喜作の紹介で、養子ではなく名跡相続によって武士の身分を得られるということで、永峰姓を名乗る。この年の10月に幕府は倒れた。永峰は「腐れ行く幕府」を執筆し、その中で「幕府の腐って崩れ行くことが段々ハッキリ見えてきた。幕府の末路といった形勢が眼の底によく映って来た。今のこの政事は現在の幕府の人物では盛り返すことは望まれない。（中略）幕府は残念ながらたおれなければならない。当然倒れる時機が到来したのだ。そこで我々も一生懸命勉強して、一廉の役に立ってみたい、立身出世して見たいと、兵学校に入ってミッチリ勉強したものです。」と述べている（永峰「腐れ行く」39）。「そのうちに徳川家は駿遠参において七十万石、老公は駿府に移住することとなる。すると間もなく、秀樹は徳川家の武将連中の列席に呼び出されて従来の履歴を尋問され間もなく『歩兵下役』と昇級し『家内大悦びなり』」となった。そして老公の駿府移住のお供を命ぜられ、禄は三人扶持であった。移住については妻一人だけを同行した」とある（保坂『評伝』11-30）。

永峰の略歴が大野虎雄『沼津兵学校と其人材 付属小学校並沼津病院』に記されている。この文章は、永峰の自叙伝『思出之まま』を参考に執筆されたものであるが、彼が英学を志す様子がよく描かれている。

（明治元年）9月沼津に来たり、水野家の長屋に坂本金次郎（後資業生たり）と同居したが此時21歳であった。10月に入りて沼津に集る者漸く多く新設の兵学校に入学を志願する者二、三百人に達したるを以て当局に於ては開校に先立ち之等を予備科に編入し、予備教育を授け、順次試験をして兵学校に入学せしめた。氏は明治2年4月資業生の試験に首席を以て合格し、英仏語の選択に関しては同期生中川錠蔵（将行）と謀って、本校が英語の教師優秀なるの故を以て英語を選択した。資業生となつてからは月々4両の手当を支給されたので、英書等も買ふ事を得て中川と相携へて英語研究に没頭し、ようやくにして独り歩きができるようになった。（大野『沼津兵学校』105）

2-4 内藤伝右衛門

内藤伝右衛門は、1844（天保14）年に山梨県八幡北村手塚家に生まれ、生後間もなく甲府で老舗の書籍商藤屋伝右衛門とますの養子となった。二代目伝右衛門は、山梨日々新聞の前身、峡中新聞の創設者となった。1879（明治12）年にアーネスト・サトウによる『清朝史略』という編著書を佐藤楚材の名前で出版した。また、永峰秀樹の著書も数冊出版している。稲岡勝は、サトウは「甲州方面には4度訪れ、その都度必ず内藤と会っている」、「明治10年4月20日、7泊8日の甲州旅行の途次サトウは甲府に内藤を訪れた。二人は旧知の間柄のようにも思えるが、その調査は今後を期待したい。」と述べている（稲岡「アーネスト・サトウ」47）。サトウがどのように伝右衛門と知り合ったのかは分かっていないのであるが、サトウの甲州への4度の旅は、1877年4月20日、1879年12月、1881年8月19日、1882年5月21日に行われた。『日本旅行記』の中でわかる限りでは、サトウが最初に伝右衛門と出会ったのは、1877（明治10）年である。それ以前1872（明治5）年にもアーネスト・サトウは甲州を旅行したが、その時には

内藤伝右衛門と会ったという記録はない。1877（明治10）年の内藤伝右衛門との出会いの部分の日記には木山清一という人物が出てくる。「ここで木山清一が仲間に加わった。彼は何年も前ミットフォードと京都に向かい、その後スタンホープ〔軍艦デュプレクス号、同オーシャン号艦長〕と『オーシャン号』に乗った男で、私を藤村紫郎県令の所へ連れて行ってくれた。（中略）その後、内藤伝右衛門の事務所にむかった。」という記述である（サトウ『旅行日記1』53-54）。サトウを内藤伝右衛門に紹介したのは、木山清一という、京都でオーシャン号に乗船したことがあるサトウとは旧知の人物だったのである。この木山は、県令藤村の使いの者で、「県令は私に土地で獲れた葡萄を使った甲府産のワインを数本とブランデーを、ワイン製造者でかつ本屋の木山に持たせて送ってよこした」と記されている。さらに、「木山は、私が伊達従二位に会った時の、りりしく少年らしい通訳者だとわかった。彼は1870年には伊達に仕えていたのだ。今では26歳の温厚で賢い若者に成長している。」（サトウ『旅行日記1』53）と記されている。アーネスト・サトウが伊達従二位に会った時期について、翻訳者庄田は訳注で1866年宇和島に行った時としている（サトウ『旅行日記1』54）。アーネスト・サトウを伝右衛門に紹介したのは、甲斐の国でワイン製造と本屋を営む木山という人物であった。

何故、アーネスト・サトウがこのように頻繁に甲州を訪れたのかはわからない。1877年の甲州行きは、4月17日に決行された。当時、横浜に住むサトウにさえ、毎日のように西郷隆盛暗殺計画についての情報が行き交っており、西郷は9月24日に最期を遂げた。サトウは西郷隆盛を高く評価していたので、自分が知っている大久保利通や川路、山縣有朋、伊藤俊介が、いずれも西郷の旧知でありながら西郷の暗殺計画を進めていることに嫌悪を感じたのではないかと筆者は推察している。サトウは西郷について次のように語っている。「後藤（象二郎）は、それまでに会った日本人の中で最も物分りの良い人物の一人であったので、大いにハリー卿の気に入った。そして私の見るところでは、ただ西郷だけが人物の点で一枚後藤にまさっていたと思う」（サトウ『一外交官』61）。すなわち、サトウにとっては、西郷が日本人の中で一番の「人物」だったのである。

サトウは明治維新をけん引した多くの人々と交際していた。それらの人々の多くは薩長の人々であり、彼らは西郷暗殺計画の首謀者たちであった。サトウの人脈の中で、この計画に無縁だったのが甲州の出身者たちだったのではないかと筆者は考えている。

2-5 三枝与三郎

三枝与三郎は、1844（天保14）年に山梨県岡部市松本に生まれた。前出小野清五郎の実弟である。与三郎は、父英作の生家（父は三枝家に養子として入っている）兩宮家の養子となったが、義父の酒癖が悪かったため、与三郎は兩宮家を出て、三枝家に戻った。その後、勘当同然の身で生家を出た与三郎は、清五郎の紹介で、丁度小野（永峰）秀樹が平山に随いアーネスト・サトウに出会った頃に、アーネスト・サトウのボーイとなっていた（松本『小野』27）。三枝与三郎について、松本良三が、アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』の中で「ヤス」と呼ばれる人物が与三郎であると言及している（松本『現実』78）。松本によれば、1868（明治元）年3月にアーネスト・サトウは、朝見の儀のために京都知恩院を出発して四条通の角を右に曲がったところを暴漢に襲われた。その時に与三郎はその場から逃げずにいたという。与三郎は生涯このエピソードを自慢話にしていた（内田126-127、松本『現実』80）。松本は「サトウが如何に翁を愛したかは、その著書『日本に於ける一外交官』の中の翁の在館当時の記憶に『ヤス』（与三）の名が頻々として現れ、而もサトウの行く所へは大概伴われたのによっても窺われる。」と記述している。アーネスト・サトウの同著に「ヤス」は数回登場する。「（野口富蔵）は、あくまで正直で誠実な男であった。安の方は、もっと下層の階級に属した餓鬼っ子で、何の取り枝もなかったように記憶する。」（サトウ『一外交官（上）』211）と記され、松本良三による三枝与三郎の記述や与三郎自身の述懐とは異なった印象を与える。与三郎は、1867（慶応3）年1月1日から1868（明治元）年11月ま

での約2年間公使館に勤務していた（サトウ『一外交官（上）』211）。

与三郎はその後、小田原、次に銀座に「伊勢屋」という外国人相手の洋品雑貨店、主として毛糸を扱う店を出した。内田魯庵は、三枝与三郎を「銀座の大久保彦左衛門」、「東京一の洋物直輸入商たる実力」、「銀座人は皆伊勢与に一目置いて親分株に立て、銀座人の悶着は町政其の他一家の私事に到るまで伊勢与が顔を出せば直ぐ落着した」と人柄も能力も非常に高く評価している（内田『魯庵』119-146, 81）。また、内田は、与三郎がサトウのボーイをした後に伊藤博文とも70日余りを同じ船の中で過ごしたことにも触れている（内田『魯庵』135）。内田魯庵は、「維新の同じころ同じ外国人（サトウ氏だともいうがツイ忘れた）に使われていた朋輩同士で、主人に信用された結果、一は食糧品、一は雑貨を主人の世話で外国商人から仕入れて小さな商売を始めたのが創業の抑々であった」と記している（内田『魯庵』50）。雑貨の方は三枝与三郎であり、食料品は亀屋を創設したとあるので杉本鶴五郎である。杉本鶴五郎については後述する。

イギリス公使館を去った後、「この2年間のイギリス公使館時代を通じて、与三郎はカタコトの英語を覚えたり、外国人の使う日用品の数々の知識を身に付け40両の貯金を元手に唐物屋の開業に向けて出発した」と『東京築地居留地百話』に記されている。当時の様子について、同著には、

与三郎は築地居留地近くで開業をめざした。公使館書記の小原権三郎の紹介で、南小田原町二丁目の杉本鶴五郎（亀屋の初代）を尋ねて相談したところ、幸い鶴五郎の好意で間口九尺、奥行き二間半の長屋の一角を開けてもらって借りることができた。横浜へ仕入れに行く。上州屋という洋酒屋を当てにして行ったところ、ここで横浜の仲買人になっていた弟の忠四郎と出会い、彼に案内されて、仕入れた雑貨の箱を船に積んで築地へ運び、備前橋際の河岸から荷揚げして店に並べた。与三郎は公使館時代、船にはさんざん乗っていたのでなれたものだった。

こうして明治2年2月、電光石火の早業で唐物屋の伊勢屋が開業した。時に与三郎26歳、3月には鶴五郎の妹かねを迎えて夫婦となった。これが三枝家の始まりであり、時代の変化を象徴する洋品店の始まりであった（清水「洋品店」98）。

と述べられている。アーネスト・サトウの元で働いたことは、与三郎の人生に大いに役に立ったのである。

小括

アーネスト・サトウと関わった甲斐の人々には、サトウに関わる以前から相互に親子兄弟等の血縁、同郷・同じ学問所の師弟関係等の地縁による親交があった。その親交が互いをサトウの元に呼び寄せ、英語や西洋についての学びを促進させたといえる。次章では、その相互関係について詳しく述べる。

3. 甲斐の国の人々のネットワーク

本章では、前章で取り上げた6名の人々の相互関係を考察する。小野清五郎と平山省斎は、幕府がアーネスト・サトウに派遣した書記として長崎に滞在していた。小野清五郎は徽典館の教授であり、平山は教授ではなかったが指導を行った。小野清五郎は三枝与三郎の実兄であり、与三郎をアーネスト・サトウにボーイとして紹介した。平山は、徽典館で永峰の指導をし、永峰は平山を追って長崎へ行き、サトウを垣間見たのである。アーネスト・サトウを内藤伝右衛門に紹介したのは、長崎で通訳をし、アーネスト・サトウと面識のあった甲斐出身者木山清一であった。残念ながら木山が如何なる人物だったかは明らかにできなかったが、甲斐出身者がサトウを甲斐の出版業界に導き、アーネスト・サトウの著作を出版したのである。伝右衛門は、永峰秀樹の実兄小野泉（山梨県学務課員、医師、甲斐国誌編纂者）と『甲

斐国誌』校正と出版を通して交流があった。伝右衛門の義母、内藤ますも小野泉と親交があり、小野家と内藤家は長い付き合いがあった（河田）。

以上のことから、アーネスト・サトウと甲斐の人々との関係に強く働いている少なくとも二種類のネットワークを読み取ることができる。一つは徴典館のネットワーク、もう一つは商人のそれである。

3-1 徴典館の教育者たち

徴典館については、明治16年の火災で焼失してしまったために関係史料はほとんど残されていない。わずかに残された資料で辿ると、「甲府勤番士とその子弟を教育する目的で、寛政8（1796）年頃」に創設された。その後、1843（天保14）年4月に江戸昌平坂学問所の分校として再編開校され、江戸昌平坂学問所の教授が一年毎交代で担当を務めることになり、主として漢学が教授された（『山梨県史』524）。幕末、甲府が幕府直轄地であったため、政争の渦中であって一時活動を休止したが、間もなく教授が開始された。1872（明治5）年、学制頒布により徴典館学則が改正されて洋学中心の学問所となり、1875（明治8）年、山梨県師範学校と名称変更した（山梨県師範学校『創立六十年』140-144）。

学頭名については史料により若干のずれはあるようであるが、『県史』が修正を加えたものに成瀬哲生氏の「中村幸彦文庫」をもとに作成した徴典館学頭名を加え、さらに学頭となった人々が昌平坂学問所と徴典館の教授の外にどのような役職に就いたかを国立公文書館史料で調べた結果をもとに表1を作成した。

徴典館の著名な学頭には、岩瀬忠震（修理）、田辺太一、中村敬字等がいる。いずれも、幕末の対外政策に奔走した人々である。成瀬哲生によれば、岩瀬忠震と永井尚志（岩之丞）は幕府海軍を担い、矢田堀、伴、妻木、田辺、林、依田、中村、菊地はいずれも、鎖国から開国への政策転換、国際化を担った人々であり、徴典館は「国際化のための人材養成の場であった」と指摘している（成瀬「徴典館学頭（下）」242）。永井、矢田堀、伴は、勝海舟『海軍歴史I』（1855（安政元）年頃の記録）にも頻出し、勝と長崎海軍伝習所で親交があったことがわかる（江藤151-204）。表1中、成瀬が開国・洋学関係者とした者を太字で示し、それ以外に洋学に理解を示し、子弟を洋学に導いた人々に◎を付した。開国・洋学に関連のある人々が1850（嘉永3）年から1859（安政6）年に集中していることがわかる。成瀬も1860（安政7）年前後は、甲府徴典館の歴史の「大きな曲がり角、安政の大獄の甚大な影響を受けた時期」であり、「安政の大獄までの甲府徴典館学頭の多くが抜擢されて幕府行政官に転進していったのとは、大きく様相が異なる」と示唆している（成瀬「徴典館学頭（下）」240）。本節では、岩瀬、田辺、中村について述べる。

田辺太一の父で徴典館学頭でもあった田辺新次郎は幕府儒者であるが、長男孫次郎は高島秋帆の下で西洋砲術を学び講武所の教授となり、二男の太一は、安政3年に父と同じ徴典館学頭なり、後に外国奉行となった。乙骨彦四郎（耐軒）の息子は、乙骨太郎乙という沼津兵学校で教鞭を取った洋学者である。乙骨太郎乙は、1876年アメリカ・フィラデルフィア万国博覧会のために「教育誌略」（大槻修二著、仲通高校関）を英訳した（高橋142-143）。坂口筑母は、彦四郎について「晩年には、幕閣阿部正弘が確立した海防体制の中核たる目付の任務、海防・外交・蝦夷地対策等に関する建議書や上申書の起草にあたり、才能を縦横に発揮した。すなわち、幕末外交の機密に参画したのである」（坂口『乙骨』4）と記している。

表1 徽典館歴代学頭とその職歴

年号	学頭名	その他の役職	学頭名	その他の役職
天保14年	友野 雄助	不明	◎乙骨 彦四郎	海防目付
弘化2年	◎平岩 右近	不明	木村 金平	不明
3年	林 伊太郎	古河鋳業会社経営	◎田辺 新次郎	
4年	◎平岩 右近	不明	木村 金平	不明
5年	小林 栄太郎	不明	榎本 愛之助	不明
嘉永2年	新井 忠次郎	不明	宮本 久平	不明
3年	岩瀬 修理	外国応接・外国奉行	◎田辺 新次郎	
4年	◎永井 岩之丞	外国奉行・大審院判事	長谷部 甚弥	儒者 静岡学問所
5年	◎久貝 伝太	特になし	矢口 清三郎	目付 長崎奉行所支配調役
6年	矢田堀 景蔵	幕府海軍総裁	◎乙骨 彦四郎	
7年	*岡本 信太郎	不明	*伴 鏡太郎	御軍艦頭 咸臨丸乗船
安政2年	*妻木 中務 (妻木 頼矩)	大阪城を新政府軍に引き渡す役。	*小島 廉平	翻訳筆記方出役
安政3年	蒔田 幸一郎		田辺 太一	外国奉行
4年	*林 五郎次郎 (山口直毅)	外国奉行	新井 鏡次郎	不明
5年	依田 克之丞	小納戸	中村 敬宇	東京帝国大学教授
6年	*榊原 鉦次郎	不明	*菊地 駿助	神奈川修文館学頭
7年	御牧 又一郎	不明	松尾 栄太郎	不明
万延元年	長谷川 乙次郎	不明	猪倉 辰三郎	不明
文久2年	不明		不明	
3年	三浦 猪八郎	不明	富山 讓輔	日光学頭
4年	内藤 七太郎	京都文武場学頭	野口 運之助	不明
慶応元年	池田 活平	学問所教授方駿府明新館学頭	白井 佐一郎	不明
2年	塩谷 修輔	儒者	清水 輔次郎	大久保出雲守御預与力仮御抱入学問所教授方手伝
3年	酒井 一郎	駿府明新館学頭	岡田 宣輔	学問所 教授方出役

* 『山梨県史 通史編』 p.529の表14-2では「不明」とされているが、成瀬哲生著「関西大学所蔵『徽典館学頭交替名前(徽典館学頭名録)』について 上」で公表された学頭名として記載されている名前を記入している。成瀬氏は、「中村幸彦文庫」の中に著録されている同史料に基づいて同論文を執筆したとしている。

岩瀬忠震(修理)

岩瀬は、1818(文政元)年三河国旗本設楽家の三男に生まれた。22歳の時に岩瀬家の養子となり、25歳で昌平坂学問所に合格。1849(嘉永2)末年、徽典館の学頭となり、その2年後には江戸にもどる。1859年に徽典館で教えていた平山とは深い親交があった。1854(嘉永7)年、岩瀬が日米和親条約締結に尽力する頃から平山と行を共にし、二人は安政の大獄により、1859(嘉永2)年岩瀬は永蟄居。平山はお役御免で甲府勝手小普請を命じられて徽典館で教えるようになったが、それぞれに処分を受けるまで、外交に重要な役割を果たしたのである。岩瀬は、1854(嘉永7)年に異国応接掛に任命され、蕃書調所発足の役割も果たした。1861(文久元)年病死。享年44歳。岩瀬は1915(大正4)年に名誉回復され、「大

正大礼贈位内申書卷十五」(国立公文書館蔵)に次のようにその功績が讃えられている。1853(嘉永6)年米艦が浦賀に来た時に、「衝ニ当リ其他条約ノ草案新令ノ発布砲台ノ築造巨砲兵艦ノ製造長崎海軍ノ新設等」の一つとして忠震が貢献しなかったものはなかった。また、「安政4年米領事ハリスと条約の各款ヲ議定スルヤ外交至難ノ局ニ当リ非常ナル難論」があったにも関わらず、海外に対し「多大ノ国辱ヲ招カサルノ結果ヲ呈シタルハ」偏に「忠震ノ折衝ノ功」であると述べられている。

田辺太一

1831(天保2)年幕府儒者、昌平坂学問所教師田辺新次郎の次男として江戸湯島に誕生。1846(弘化3)年、新次郎が甲府徽典館学頭に転任したため、太一も甲府に赴く。1849(嘉永2)年、昌平坂学問所入学。1855(安政2)年、甲府徽典館学頭となる。1857(安政4)年、長崎海軍伝習所三期生となる。1859(安政6)年、外国方、1863(文久3)年、外国奉行支配となった。1867(慶応3)年、外国奉行となり、パリ万国博覧会へ徳川昭武一行に随行。ナポレオン三世に謁見。1869(明治2)年、沼津兵学校教師となった。1871(明治4)年、岩倉具視米欧使節団に外務省書記官として随行。1874(明治7)年より、清国との国交親善に尽力。1883(明治16)年、元老院議員。1915(大正4)年死去(尾辻『幕末』)。

中村敬宇

中村敬宇は、1832(天保3)年江戸麻布に生まれた。1848(嘉永元)年、昌平坂学問所寄宿寮に入る。1846(弘化3)年15歳の時に、井部香山の塾で学んだ。桂川国興の家で洋書を目にして、洋書を読みたいと父に申し出る。父親はそれを許さなかったが敬宇の真剣さに母親が取りなし、洋書を読むことを許された(中村『千字文』30)。当時洋書を読むことは「国禁」であったため、「公然繙くべきに非ざれば故らに、机上の見台に漢籍を披き其抽斗の内に蘭書を入れ、人の来らぬ間のみを窺いて之を読」んでいた。1859(安政5)年中村敬宇は、徽典館の学頭となり、甲府に赴任した。1866(慶応2)年35歳の時に、英国留学を志願し、留学生取締として留学を命じられた。1868(明治元)年、静岡学問所一等教授となる。1873(明治6)年、同人社を設立。1875(明治44)年東京女子師範学校摂理。1881(明治14)年、東京帝国大学教授となる。1890(明治23)年、東京女子高等師範学校長となる。「敬天愛人」を座右の銘としていた。1891(明治24)年死去。

3-2 商人の世界

第一章で述べたように、アーネスト・サトウと直接関わった商人に内藤伝右衛門と三枝与三郎がいた。三枝与三郎と同様銀座で開業し成功を収めた人物に杉本鶴五郎がいる。杉本は、越中出身で甲斐出身者ではない。三枝と懇意で、三枝は杉本の妹と結婚した。内田魯庵は、杉本もアーネスト・サトウのボーイとなっていたように記述しているが、実際は、銀座新栄町に住んでいたハーレンスというドイツ人のボーイとなっていた(佐瀬『当代の傑物』33)。杉本は、「自分の妹婿の三枝与三郎が唐物店を開いていたので、ドイツ人のハーレンスは常に此店に来て三枝夫婦とは懇切であったから、或日夫婦に一人の確実な番頭を世話して呉れろとの話を縁として自分は其売込番頭に入りました」と記している(佐瀬『当代』33)。

岸田劉生著『新古細句銀座通』には、「かめ屋は古い。昔のかめ屋は横丁に向いた白赤色の壁を持っていてペンキで非常にうまく、西洋風のポンチ絵のような絵がかいてあった。やはり食料品のポスター風の役目をしていたものであろうが、その絵が何か西洋の絵を模写したものらしく、当時のペンキ画工の中々描き得るものでなかったゆえであらう、絵の好きな私は、ひどくこれを崇拜し時々行ってみては感にたえて、行って来ては真似して描いていたものである」(岸田『新古』38-39)と当時の様子が描かれている。

三枝与三郎については、前述した通りであるが、三枝も杉本も駐日外交官から西洋の趣向を学び取り、商売に活かした。彼らは、築地や銀座に店舗を構えたという共通点がある。三枝与三郎は築地南小田原町2丁目、杉本鶴五郎は銀座竹川町に店舗を構えた。永峰も、築地にあった海軍兵学校に移った後、「銀座の裏通りに下宿していた」と記している。ギゾーの文明史の翻訳書に記された永峰の住所は「東京芝愛宕町3丁目壱番地」である。アーネスト・サトウもまた、芝、神田、銀座当たりの本屋で「明治3年から明治12、3年頃までの間に、市中で買ってあります。芝の岡田屋から多く買っています」と反町茂雄が言っているので、生活圏が彼らとほぼ一致していた（反町『紙魚』9）。内藤伝右衛門は明治10年に東京に出、通塩町11番地に開店した（山梨『拓く』187-188）。アーネスト・サトウと内藤伝右衛門、三枝与三郎と永峰秀樹が偶然にも近くで活動をしていたのである。与三郎は、永峰にギゾーの英訳書の翻訳を依頼したとされる山城屋稲田政吉の近くに居住し、懇意であった（内田『魯庵』109、135）。

小括

徼典館は、1844（天保14）年より江戸昌平坂学問所の教授2名が一年交代で派遣されていた。『東京大学百年史』では、「（安政4（1857）年）に幕臣の間に洋学に対する関心の高まりがあった」とされているが、前出表1より、徼典館で西洋の学問を志向し、開国思想を持っていた人々が学頭になったのは、それより10年以上先んじていた。「左遷」と言われた徼典館行きは、逆に幕府の目を逃れて、昌平坂学問所の水準を持つ学頭たちの自由闊達な開明的な学問所となっていたのではないか。

小野清五郎は、岩瀬、平岩、久貝等に指導を受け、平山は、岩瀬に愛された。永峰は1855（安政2）年以降慶応元年頃まで徼典館で学び、中村敬宇、田辺太一等の指導を受け、特に1867年平山を慕って長崎へ赴いた。平山は、安政年間においては岩瀬と共に長崎と日本全国を奔走し、1861年岩瀬の死後、小野清五郎と共に長崎でアーネスト・サトウの書記を務めていた。小野清五郎は実弟三枝与三郎をアーネスト・サトウにボーイとして推薦し、与三郎は、アーネスト・サトウの元を1868年に離れてから英語の語学力を生かして貿易を手掛ける三枝商会を創立した。与三郎は、妻の兄杉本鶴五郎をドイツ人ハーレンスに紹介し、洋物を扱う商人に育てた。このように見ると、徼典館の教育者たちが各方面で甲斐の人々をけん引していたことがわかる。

おわりに

甲斐の国は、幕府直轄領であって、幕府の左遷組の居住地という印象が否めない地域であった。この地域から、1840年代から洋学に興味関心を持っていた甲斐の国人々が、当時日本で唯一海外に開港を認められていた長崎に1862（文久2）年に来日したアーネスト・サトウの周辺に集まっていた。彼らは、サトウから英語と西洋文化を吸収し、幕末維新期に様々な方面で活躍したのである。「はじめに」でも述べたように、『東京大学百年史 通史1』では、「この当時は幕臣の間に洋学に対する関心の高まりがあったと言える。その一因として、身分の低いものや勤仕のない者にとって、当時は洋学を身に付けることが立身出世の糸口となると考えられたことが挙げられるだろう。」と述べられている。確かに、武士の身分を手に入れた永峰も元々名門武家に生まれながら落ちぶれた家から飛び出した三枝与三郎も、英語を身に付けることによって身を立てようとしていた。しかしながら、小野清五郎のように「切腹廃止論」「御用金廃止論」を唱えた者もいれば、平山のように安政の大獄、大政奉還の後には、1872年から神道家に転身した者もいた。永峰も「腐れ行く幕府」、「幕府は倒れて当然」と述べ、彼らは幕府の在り方に批判的だった。三枝与三郎は「銀座の大久保彦左衛門」と呼ばれ、「銀座人の悶着は町政其の他一家の私事に到るまで伊勢与が顔を出せば直ぐ落着いた」と言われるほどの存在感を示したという（内田140）。内藤伝右衛門は、出版業で山梨県のジャーナリズムの発展に寄与した。彼等の生き方には、決して個人主義的「立身出世主義者」ではなく、幕府に批判の目を向けながら、身に付けた英語力や西洋の情報を社会に活か

そうとする姿勢を読み取ることができる。

彼らは、幕府の内側にいたからこそ、幕府の鎖国体制の限界に早期に気付き、開国・国防の必要性に敏感であり得た。江戸との交流を活かして、日本の将来を考えながら洋学を学ぶ人々が多かったのである。そして、徽典館という学問所がそうした交流と学びの中心となっていたことは言うまでもない。さらには木山が内藤伝右衛門にアーネスト・サトウを紹介したような地縁、そしてもうひとつ、小野清五郎と三枝与三郎、田辺新次郎と田辺太一、乙骨耐軒と乙骨太郎乙等の間の血縁関係によって縦横無尽に強く結ばれたネットワーク力があつた。こうしたネットワーク力がアーネスト・サトウと甲斐の人々を結び付け、甲斐の人々の西洋社会文化への理解を拡げていったといえる。当時容易に海外留学ができなかった人々にとって、英国人外交官アーネスト・サトウのような日英両言語に精通している外交官の存在は重要な意味を持っていた。

しかし、そこに到るまでに、江川太郎左衛門、幡崎鼎、渡辺畢山、高島秋帆等のように洋学に関わつた人々が次々に罪を問われたこと、蘭医広瀬元恭が甲斐に存在したことも忘れてはならない。今後は、こうした人々も含めたより広く深い幕末維新期の社会的状況への理解を深めていきたい。

本研究は、日本学術振興会科研費基盤 (C) 「ギゾーと幕末日本－文明論のグローバルな影響－」(2019年度～2023年度)の助成を受けて実施しています。

<参考文献>

- 1) 天野春夢『荒海の彼方に』日本文学館 2010年
- 2) 有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅲ』創元社 1974年
- 3) 井戸桂子「日光におけるアーネスト・サトウと武田久吉」『駒沢女子大学研究紀要』第25号 2018年
- 4) 稲岡勝「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」『明治の出版文化』臨川書店 2002年
- 5) 岩生成一編『近世の洋学と海外交渉』巖南堂書店 1979年
- 6) 内田魯庵『魯庵随筆 読書放浪』東洋文庫 平凡社 1996年
- 7) 江藤淳『勝海舟全集8 海軍歴史I』講談社 1973年
- 8) 大久保利謙『幕末維新の洋学 大久保利謙歴史著作集5』吉川弘文館 1986年
- 9) 大塚武松『幕末外交史の研究』寶文館 1952年
- 10) 緒方富雄編『蘭学と日本文化』東京大学出版会 1971年
- 11) 小田律「サア・アーネスト・サトウ」『日本読書協会会報』163号 1934年
- 12) 尾辻紀子『幕末外国奉行 田辺太一』新人物往来社 2006年
- 13) 鬼丸智彦『京都時習堂 幕末の蘭医 広瀬元恭の生涯』アーカイブス出版 2008年
- 14) 小野寺龍太『五州何ぞ遠しと謂わん 岩瀬忠震』ミネルヴァ書房 2018年
- 15) 片桐君美『江川坦庵伝 続12話』静岡新聞社 2012年
- 16) 河田敦子編著 加藤時男翻刻『幕末明治の女性 内藤ますの生涯とその教養形成過程－「駿河紀行」全文翻刻付』お茶の水女子大学グローバルCOE「格差センシティブな人間発達科学の創成」2010年
- 17) 岸田劉生『新古細句銀座通』東峰書院 1959年
- 18) 清雲俊元「内藤伝右衛門」齊藤俊章編『郷土史に輝く人々』少国民社 1974年
- 19) 倉沢剛『幕末教育史の研究 1』吉川弘文館 1983年
- 20) 國米重行『幕末英国外交官 アーネスト・サトウの秘書 野口富蔵伝』歴史春秋社 2013年 國米は、野口富蔵の曾孫。
- 21) アーネスト・サトウ 坂田精一訳『一外交官の見た明治維新(上)』岩波文庫 2018年
- 22) アーネスト・サトウ 坂田精一訳『一外交官の見た明治維新(下)』岩波文庫 2018年

- 23) アーネスト・サトウ 庄田元男訳『日本旅行日記1』東洋文庫 平凡社 1994年
 - 24) アーネスト・メイスン・サトウ 庄田元男訳『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』講談社学術文庫 2017年
 - 25) 坂口筑母『乙骨耐軒 幕末の官学派詩人 附載・林鶴梁宛書簡9通』明石書房 1976年
 - 26) 清水正雄「三枝与三郎の洋品店」『東京築地居留地百話』冬青社2007年8) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史1』東京大学出版会 1984年
 - 27) 酔襟散人 佐瀬得三編『当代の傑物』実業之日本社 1906年
 - 28) 杉本亀五郎「亀屋輸入店奮闘成功譚」『成功』春期臨時増刊号 1906年
 - 29) 反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正編』八木書店 1990年
 - 30) 高橋陽一『共通教化と教育勅語』東京大学出版会 2019年
 - 31) 竹村覚『日本英学発達史』研究社 1933年
 - 32) 手塚晃 国立教育会館編『幕末明治 海外渡航者総覧 第3巻検索編』柏書房 1992年
 - 33) 陶徳民編著『平山省斎と岩瀬忠震』関西大学出版部 2018年
 - 34) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史1』東京大学 1984年
 - 35) 永峰秀樹『思出之まま』永峰春樹編・刊行 1928年 p.4
 - 36) 永峰秀樹『腐れ行く幕府』永峰秀樹著永峰春樹編集発行『思出之まま』所収 1928年
 - 37) 中村敬宇・石井民司『自叙千字文 中村敬宇伝』大空社 1987年
 - 38) 成瀬哲生「関西大学所蔵『徽典館学頭交替名前(徽典館学頭名録)』について 上下」『山梨大学人間科学部紀要』第10巻 2008年
 - 39) 萩原延寿『遠い崖1 旅立ち』朝日文庫 2011年(初版は2007年)
 - 40) 原平三『幕末洋学史の研究』新人物往来社 1992年
 - 41) 平山成信『省斎年譜草案』1908年
 - 42) 堀田正敦 等編『寛政重修諸家譜 第17巻』続群書類従完成会 平文社 1965年
 - 43) 保坂忠信『明治初期翻訳・文化功労者 評伝 永峰秀樹』リーベル出版 1990年
 - 44) 松本良三『小野清五郎伝』光文堂 1938年
 - 45) 松本良三「三枝与三郎翁の生涯」『現実の彼方へ』 1941年
 - 46) 宮永孝『日本洋学史 葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』三修社2004年
 - 47) Morton, Robert & Ruxton, Ian, *The Diaries of Sir Ernest Mason Satow 1861-1869*, Eureka Press, 2013.
 - 48) 山梨県『山梨県史 通史編4 近世2』2007年
 - 49) 山梨県立甲府中学校編『創立六十周年記念誌』山梨県立甲府中学校校友会 1941年
 - 50) 山梨文化会館編『山梨を拓く 新聞人が挑んだ150年〈上〉』山梨文化会館2022年
-
- (受付 2022.3.25 受理 2022.6.30)

